

氏 名 (本 籍)	李 基 東 (韓国)
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	博 甲 第 264 号
学 位 授 与 年 月 日	昭和60年 3 月25日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	哲学・思想研究科 倫理学専攻
学 位 論 文 題 目	東アジアにおける朱子学の地域的展開—その比較論的考察—
主 査	筑波大学教授 文学博士 高 橋 進
副 査	筑波大学教授 文学博士 湯 浅 泰 雄
副 査	筑波大学助教授 広 神 清
副 査	筑波大学教授 文学博士 長 瀬 守
副 査	筑波大学教授 文学博士 内 山 知 也

論 文 の 要 旨

本論文は、東アジア三地域において新儒学としての朱子学が如何なる歴史的背景のもとに成立し、いかなる地域的特性を表徴しつつ受容され展開し定着したかを、伝統的儒学の本来的特質としての「修己の学」的性格と「治人の学」的性格、及び両者の総合的統一を、思想及びその歴史的展開を考察する方法論的視点として設定し、もって三地域諸思想を統観し再構成するとともに、朱子学が三地域において個性的に展開する諸相を比較論的に詳述論到したものである。論文全体の構成は、序、序説及び本論五編(全20章)と結論とから成り、400字結原稿用紙777枚に及ぶ。

序及び序説では、本研究の目的、対象、方法を述べ、次いで中国古代諸文献の考察によって伝統的儒学における「修己の学」的側面、「治人の学」的側面及び両者の総合的統一の理論としての「中庸」の思想を解明し、これらの本研究の方法論的視点とする。

第一篇「新儒学の興起と朱子の性格」では、魏晉南北朝期における儒学の衰頹と道家思想の展開を概観し、次いで仏教の受容が中国の思想・社会に及ぼした影響を論ずる。就中仏教教理における死生観の問題は、中国伝統思想が真正面から取り扱わなかつただけに、極めて衝撃的な影響を与えたとし、具体的には仏教によって外の世界に対する無常観や死を克服する論理が浮彫りにされた結果、個の内側に傾斜する「修己の学」的性格は、対他・対外的な「治人の学」的性格を待たずに、より一層内に向かって修己の追求に徹して行き、また「治人の学」的性格は、外の世界を無常と見做す仏教思想に反撥して、より一層外の世界(社会)に執着する傾向をもたらし、やがて「修己の

学」と「治人の学」の両面の調和が分岐し、それぞれの立場から仏教に対抗する論理ないし方法論を創出するに至り、韓愈の排仏思想と李翱の成聖論がまさにその徴表であったと論証する。そして、韓愈の「治人の学」的性格が北宋の欧陽脩・司馬光らに継承・発展され、李翱の「修己の学」的性格が周敦頤・張載・程頤らに継承・発展され、朱子に至って統合される過程を、個々の思想家毎に、死生観・成聖論・理気論を含む宇宙論ないし世界観・人性論・名分論・居敬窮理論等を指標として有機的・関連的に再構成し詳細に論証する。

第二篇「天命觀念と人間観の地獄的展開」では、まず朱子の天命觀念は「修己の学」的性格においては万物の創造～生成原理及び人間における本然の性を導き出し、「治人の学」的性格においては天命觀念は運命の意味を与えられ、さらに個物的人間存在の根拠としての気質の性を導き出し、両者は人性論において統合されるとする。しかるに、高麗末・李朝期に朱子学が受容されると、「天即理」としての「天人無間」の思惟形式に基づいて、天の命としての性なる觀念は稀薄化し、居敬工夫という天人合一のための直接的修養論だけが展開され、理気論は二義的なものに位置づけられるとし、政治思想においても王道論よりさらに徹底した至治主義の思想が趙靜菴・李栗谷らによって主唱されるに至ることを論証する。他方、日本に受容された朱子学は、江戸初期においては韓国に受容され定着した朱子学の影響もあって、「天人無間」説、「万物一体」説などが継承されるが、やがて日本的なものに変容し、天の觀念は稀薄化して、天と人との分離され、且つ人間の個としての自存が強調されることによって、修養論として受容された居敬工夫の内容は社会倫理(五倫)に変容し、伊藤仁斎に至っては、天と命とは人力の及ばざる運命として捉えられ、地上の人間の誠を中心とした実践的道德論が主唱されるとし、政治思想においては藤原惺窩以来展開された名分論が荻生徂徠に至って礼治思想として完成されることを論証する。

第三篇「理気論の地獄的展開」では、まず朱子学の理気論を整理し、次いで高麗末・李朝期における理気論の人生論的展開をあとづけ、さらに江戸期における気哲学の展開を論述する。ここでも著者は、韓国の朱子学では天と人との直接的合一を目指す居敬工夫の実践的修養論だけが展開し、理気論そのものは思想的・実践的な関心の主たる対象になり得なかったとし、具体的には李晦斎が理気論を人生論的構造として理解し、李退溪が敬中心の修養哲学を確立し、李栗谷が誠中心の実践哲学を樹立するための手段として用いたことを論証する。また日本においては、藤原惺窩に受容された理優位の理気二元論が、林羅山の理気一体説、熊沢蕃山の気優位説、伊藤仁斎の気一元論として変容され、五倫・誠を中心とする実践的道德論を確立する理論的根拠として用いられたこと等々を詳論する。

第四篇「敬思想の地獄的展開」では、朱子における居敬窮理の相互補完論、高麗末・李朝期における敬思想の展開、江戸期における敬から誠への思想展開を中心に論ずる。まず李翱以来の復性・成聖論は、北宋期を経て朱子に至る間に宇宙論的に展開され、格物窮理という間接的・認識的方法が加味され、従来の誠の実践、滅情、思考停止等は、敬の工夫と窮理の体系に集約されたとする。しかるに韓国では、居敬のみが受容され、居敬と窮理の相互補完的修養論が居敬ひとつに集約され、さらにそれは体認・体察・四端扩充などの説となって徹底化されるとし、また日本では韓国朱子学

の影響もあって、ひとまず敬中心の修養哲学を受容するが、天の具体的・具象的把握によって、人間の形而上学的志向性が社会倫理～道徳に対する志向性へと変容し、敬の内容も五倫・誠を中心とした実践道徳を確立するための修養論として展開されることを論証する。

第五篇「政治思想の地域的展開」では、朱子における王道政治論と礼治思想を論じ、次いで李朝期における至治主義運動の展開、江戸期の礼治思想の完成を中心に論ずる。著者はここでまず、李翱以来の展開された「修己の学」の韓愈以来展開された「治人の学」との統合的統一によって大成された朱子学においては、前者の面から王道政治思想が、後者の面から礼治思想が導き出され、さらに両者が統合されていることを論ずる。しかるに韓国朱子学では「天人無間」が自明の命題と前提されるため、王道政治はさらに徹底した至治主義の運動として展開し、日本においては社会の安定と秩序の確立に問題の焦点が合わされることによって、各分論が展開され、徂徠の礼治思想として完成される過程を詳論する。

結論は、以上の論旨をまとめて、本論文の成果と主旨を明らかにしている。

審 査 の 要 旨

従来の東洋思想研究において、東アジア三地域に生じた諸思想を、一定の視座を設け方法論を確立して総合的・比較論的に考察した成果は、国の内外に未だ殆んどその例を見ない。然るところ、本研究は中国唐末の政治の紊乱、国家衰頹の過程において、伝統的儒学を振起し、排仏論理を構築する必要性から主唱された思想傾向が、北宋の諸儒によって継承発展され、南宋の朱子に至って集大成される過程を時代精神の内的必然的要請として考察・整理し、さらに新儒学としての朱子学が、韓国・日本に受容・定着され、独自の・個性的に展開される過程を、個別諸思想の検討とその比較論的考察によって究明したもので、その成果は内外学界に貢献するところ少からぬものがあると認められる。また、本研究で取り上げた対象は、従来三地域にかかる個別の思想史研究に委ねられていたもので、著者が採用した諸資料は多岐多様にわたり、そこに盛られた諸思想の理解・整理・再構成とその比較論的研究は極めて困難を伴うにもかかわらず、資料取扱いの態度、資料の解釈に概ね妥当性があり、論証は著実、導出した諸々の知見及び結論もほぼ正鵠を射ており、見るべきものがある。

個々の研究内容としては次の点の諸点が注目される。第一に、儒学本来の特質を「修己の学」「治人の学」及び両者の実践的統一としての「中庸」の論理におき、全研究対象をこれらの特質を視点として理解・整理し、また諸思想の特徴とその三地域にわたる展開の諸相の歴史的連関性を明らかにし、その際とくに三地域の諸思想を「天命観念と人間観」「理気論」「敬思想」「政治思想」等々を比較論の指標として立てて詳細に考察したこと、第二に、朱子によって集大成されたいわゆる朱子学は、李翱以来展開された「修己の学」的要素と韓愈以来の「治人の学」的要素の統合されたものと規定したこと、第三に、韓国に受容・展開された朱子学は「天人無間」の思惟的伝統に基

づき、専ら「修己の学」的要素の展開であると特色づけたこと、第四に、江戸初期に受容され、中期に定着した日本の朱子学は、日本的な発想・思惟形式に基づき、主に「治人の学」的側面が展開されたと特色づけたこと、以上からして第五に、従来韓国儒学を主理派・主気派に分けて論じ、理気論を中心に理解しようとしてきた傾向を批判し、新しい方法論と知見とを提示したこと、第六に、江戸期の儒学思想を朱子学派、陽明学派、古学派等に分類して理解することは、著者の視点と方法論からすれば余り意味がなく、これら三派に属する諸学者の思想内容は、朱子学の日本的定着過程にあらわれる連続的なもので、非連続的なものでないことを論証したこと等々である。これらの諸点及び論証内容、知見等は本論文における特に注目すべき学術的成果である。

他方において、著者は東アジア三地域に展開した個別思想ないし朱子学を「修己の学」「治人の学」及びその総合という視点で分類・整理して把握したため、思想の地域的展開の諸特性、脈絡等については明快にして説得的な新知見を提示し得たが、反面、個別思想は必ずしも上の儒学的特質のいずれかに割り切れない面もあって、若干の無理な性格づけがなされている嫌いがある。また、諸思想の歴史的展開過程の中でも考察言及の対象とされていない重要なものがあること、先行する諸研究成果について、著者は検討はしているが論述の過程でその成果の比較校合等を行えばなお一層説得力のある論文となったと思われること、また総じて、本論文は諸思想の論理的展開の側面に焦点を置いているため、新儒学のもつ歴史的な性格、とくに朱子学の歴史的功罪等の考察には言及されていない。しかし、この点についてはむしろ今後の研究に俟つというべきであろう。上記の反省点とともに一層の努力を期待するところである。

以上、これを要するに、本論文は多少の予備もあるが、全体として東アジア思想史研究に特色ある一歩を印したもので、学界に貢献するところが少なくないものと認められる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものとみとめる。